の戸をおしひらき、人倫は心を調てほこるともほこらず、愚政の至り治りて見ゆ、

夜の戸ものどけき宿にひらくかなくもらぬ月のさすにまかせて、此緣邊に付て、おろ〳〵歷覽すれば、東南の角一道は、舟撰の津、商賣の商人、百族にぎはひ、東西北の三方は高卑の山風のごとくに立廻て、所をかざれり、南の山の麓に行て、大御堂新御堂を拜すれば、佛像鳥瑟のひかり、瓔珞眼にかゞやき、月殿畫梁のよそほひは、金銀色をあらそふ、○下略

〔東關紀行源親行〕抑かまくらのはじめを申せば、故右大將家○源頼朝と聞え給ふ、水の尾の御門○清和の九の世のはつえを、たけき人にうけたり、さりにし治承のすゑにあたりて、義兵をあげて、朝敵をなびかすより、恩賞しきりに、瀧山の跡をつぎて、將軍のめしをえたり、營館をこの所にしめ、佛神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた、今繁昌の地となれり、中にも鶴岡の若宮は、松柏のみどりいよ〳〵しげく、蘋蘩のそなへかくることなし、○下略

〔宗祇終焉記〕鎌倉を一見せしに、右大將家のそのかみ、また九代のさかへも、たゞめの前の心ちして、鶴が岡のなぎさの松、雪の下のいらかは、げに岩し水にもたちまさるらんとぞ覺侍る、山々のたゝずまひ、やつ〳〵、ゑまく、いはゞ筆のうみもそこ見えつべし、

〔東國紀行〕かたせ川こしごえすぎゆけば、ゆゐの濱みなせ河も見えわたるほどなり、愛阿彌、鎌倉よりむかひにきたれり、ゑるべしてむかしの跡など問きくほど、暮がたに成てつきたり、旅宿は太守より後藤かたへおほせつけられ、清閑をそへられ、幻庵より多田など案内者とてくはへられたれば、いづかたもおほつかなからず、舊跡のたびね其感有、けふは三月○天文十四年一日、早朝先鶴が岡八幡宮參詣、松の木のまのさくらさかりにて、石清水臨時の祭、舞人のかざしにおもひまがへられたり、近年御遷宮、あけの玉がきよりはじめ、見るめもかゞやく春の光、わづかにむかしおぼえたり、まづ金澤一見すべしとていそぎ侍れば、後藤案内いたしてうちいづるほど、めにちか